

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 動物応用科学科

職階 講師

氏名 大我政敏

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3 年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

動物生命工学:

動物生命工学は動物応用科学の中で重要なウェイトを占める学問である。必修科目であり、動物に関する生命工学ということで、幅広い分野の基礎知識を身につけられるよう講義を行った。具体的には、細胞工学、発生工学、幹細胞工学の3つの柱について触れた。学生が興味を持てるように新聞記事やニュース動画などを都度紹介し、動物生命工学を身近なものと捉えられるよう工夫しながら講義を行っている。

動物細胞工学: 選択必修ということではあるが、3年生では細胞を培養した経験のない履修者も散見されるため、細胞培養について動画を織り交ぜながら教科書と研究室での実際の間にあるギャップを埋めながら講義を実施している。本講義の目標は幹細胞を用いた再生医療について理解を深めることである。そこに行き着くために、培養細胞とはいかなるものかを丁寧に説明することから始め、最終的には再生医療について実に多くの事例を紹介し、先の講義との関連性を説明しながら講義を進めている。

遺伝生命科学実習:

生命科学の基本となる遺伝子発現の複雑さについて、組織特異的な発現を示すマーカー遺伝子を用いて、理解できるよう実習を行なっている。またさらに、DNAとRNAの分子の化学的な性質やその違いなどの理解を深められる実習を行なっている。

生物学実験:

遺伝子によって決まる形質についてアルコールへの耐性や味覚における受容体の個人差など身近に感じられる項目を扱い、学生により強い興味を抱かせられる実験を行なっている。

基礎ゼミ:

今後の人生において重要な教養となり得るかも知れないヒトの生殖医療に関する調べ学習を実施し、それぞれプレゼンテーションを行い、その後ディスカッションを行う内容でゼミを進めている。

専門ゼミ: プログレスレポートを行い、その内容について学生の理解を確認しながら指導を行うよう心掛けている。

専門ゼミ: 研究に着手したばかりの学生たちを相手に、研究だけでなく卒業後の仕事にも役立つスキルの習得を目標とした講義であることを説明し、自分の発表だけでなく、同僚の発表および教員からのコメントから学ぶべきことがたくさんあることをしっかりと理解させ、成長に繋げさせている。

科学の伝達:

最終学年ということで、昨年度1年間学んだことがしっかりと身についているかを確認すると共に、その更なる発展を目指した指導を実施している。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
動物応用科学実習	動物応用科学科	必修	1	143
動物応用科学概論	動物応用科学科	必修	1	140
基礎ゼミ	動物応用科学科	必修	1	148
生物学実験	動物応用科学科	必修	1	144
動物生命科学	動物応用科学科	必修	2	164
動物細胞工学	動物応用科学科	選択	3	49
遺伝生命科学実習	動物応用科学科	選択	3	37
卒業論文	動物応用科学科	必修	4	7
科学の伝達	動物応用科学科	必修	4	7

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

- ・試験や単位のための勉強ではなく、大学生だけが許される自らの興味を追い求める学びの自由を存分に楽しむ。
- ・失敗から学び、失敗を成功に繋げる。
- ・生殖の不思議を探究する。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

- ・講義の感想文の提出とそのフィードバックによる学生とのやりとり
- ・グループディスカッションの活用
- ・教育的動画資料の多用
- ・小テストの実施
- ・オンデマンド教材の活用
- ・質問をしやすい雰囲気と人間関係作り
- ・双方向のコミュニケーションを重視し、手間を惜しまない丁寧なレスポンス
- ・理解、納得を得られるまでの粘り強い説明

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

まずは、講義の最中に頻繁にクイズを出している。簡単なクイズの場合もあるし、アドリブで少し考えないといけないクイズも出す。時には正解のない議題を提示し、グループディスカッションを行ってもらっている。

(2) ICTの教育活用

有

講義で用いる資料や課題については全てオンラインでのやり取りを行なっている。中でも、動物生命工学においては、成績に影響を与えないが、單元ごとにgoogle formを使った理解度確認テストを行なっている。試験前には問題内容を開放し、何度でも100点が取れるまでトライすることができるようにし、自分の理解度を確認してもらっている。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

学生の理解度は表情を見ていればある程度把握できるので、難しいテーマで理解できず表情が変わってしまった時は、表情が元に戻るまであの手この手で例え話を織り交ぜ、イメージを作ってもらう。そもそも、文字だけのスライドを作らないように気をつけ、とにかくイラストを豊富に使っている。つまり、耳と目に訴えて、理解を助ける講義を行なっている。

（２）学生の理解度の把握

A

定期的な小テストを行なって、学生達の理解度の把握を行い、多くが間違っている内容については取り上げて、説明を行なっている。

（３）学生の自学自習を促す工夫

B

小テストを実施しているが、そもそもやる気のない学生は、試験対策をしてこないで彼らの学習意欲を高める術を模索している。

（４）学生とのコミュニケーション

A

講義後の質問には十分な時間をとって対応している。そのため次の講義に遅れそうになったり、昼食がとれなくなるほどである。講義中に目があう（こちらを注目して聴講している学生）学生にはこちらから講義後に話しかけ、講義の印象を教えてもらっている。

（５）双方向授業への工夫

B

問いかけをたくさん行い、挙手による意思表示を促しているが、当然必ずしも多くの学生が反応してくれるわけではなく、全体の把握に苦慮している。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

出欠などで不正をするなど頻繁に指導を行ったが、不評を買ったので、小言は控えるように気をつけている。

滑舌が悪いのと説明のスピードが早くなりがちで、指摘を受けたので気をつけている。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

コロナ対策として身につけていたマスクを外すことやマイクの位置について注意をした。季節によっては大半がマスクをしているし、自衛のためにマスクをせざるをえないこともあった。マスクをしてもきちんと聞こえるような技術の習得が必要である。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

講義内容のバランスを考えて、焦らず講義できるように調整する。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

定期的な小テストを行なってきた。しかし、参加意識が低いことが発覚した。単元ごとでは効果が低いかも知れないので、毎回確認テストを行うのが記憶の定着には、効果的かも知れない。その日のスライドを使えるのでフィードバックもしやすい。

わかりやすく、CGなど教員には到底準備ができないフリーの動画などを見つけて説明に使っている。

(2) (1)の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

アンケートでは、動画がとにかく好評である。小テストもありがたいと好評である。ただし、試験前にしか感謝されていないような印象でもある。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

オンラインで受講し、特に昨今はweb tool を使った教育手法が多様になっていることを学ぶことができ、今後さらに積極的に利用していくことを計画中である。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

着任2年目ということで、まだまだ講義に関する自信と反省の両方を得る実り多い年であった。次年度はこの経験を元に、説明が分かりやすい、興味深いと言った長所を伸ばし、web tool を使いこなすのが苦手などの短所を克服する。また、頑張った学生とそうでない学生の評価に更なる工夫が必要であると感じた一方で、手間をかけすぎて効率が低下している面も見られたので、教員、学生ともに、効率よく学べるシステムの確立が必要である。長期的には、生命科学に強い興味を持たない学生にもその面白さを伝えられ、より多くの学生を魅了できる講義へと昇華させたい。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

シラバス